

現代における預言者の医学 ——ザンジバル臨地調査データと予備的考察——

藤井 千晶*

1. ザンジバルと預言者の医学の背景

タンザニアのザンジバルは、東アフリカ沿岸部に位置し、ウングジャ島とペンバ島、さらに数十の島々から構成されている。総面積は2460km²(京都府の面積の約半分)、人口は約98万人(2002年時点)である。19世紀にオマーンの支配する地域の首都となった歴史的背景が大きく影響し、ザンジバルの99%以上の住民がイスラームを信奉している。

ザンジバルでは現在、「預言者の医学(Ar¹): al-tibb al-nabawī)」が盛んに行われている。「預言者の医学」とは、イスラームの預言者ムハンマドが教えた医学という意味で、クルアーンとムハンマドの言動の伝承(ハディース)に基礎を置く医学である。しかし、クルアーンとハディースでは、医学について多くの言及があるわけではない。そのため、預言者の医学の信奉者は、イスラームの教えに反していなければ、ギリシャ=イスラーム医学を積極的に取り入れていった。預言者の医学では、ガレノスやイブン・スィナーなどのギリシャ=イスラーム医学の権威も、自由に引用されている[竹下 2005: 113-115]。この領域は9世紀に生まれ、13世紀から14世紀の最盛期を経て今日に至っている。ザハビー²⁾やイブン・カイム・ジャウズィーヤ³⁾、スューティー⁴⁾の預言者の医学に関する著作は、現在もイスラーム世界で広く読まれている[Savage-Smith 2000: 453]。

筆者は2006年9月-12月にザンジバルで行った調査中⁵⁾、書店には預言者の医学に関するものが多数並び、預言者の医学に基づいて治療を行う者(治療者⁶⁾)が多く存在し、彼らの家には相談者が絶え間なく訪れていることを観察した。このように活発に実践されている預言者の医学を明らかにするために、預言者の医学に関する文献の収集と治療者へのインタビュー、治療実践の観察を中心に調査を行った。

2. 調査対象者

今回の調査は、次の2人の治療者に焦点を当てて行った。

1人目は、ストーンタウン⁷⁾郊外のM地区に住むA氏である。A氏は26歳とまだ若い、M

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

- 1) 本稿では、アラビア語を転写する場合はAr、スワヒリ語を転写する場合はSwと表記する。転写方法については、アラビア語は[大塚他編 2002]を、スワヒリ語は[Taasisi ya Uchunguzi ya Kiswahili 2001]を参照している。
- 2) al-Dhabī, 1348年没、歴史家。
- 3) Ibn Qayyim al-Jawziya, 1350年没、ハンバル派法学者。
- 4) Jalāl al-Dīn al-Suyūfī, 1505年没、タフスィール学、ハディース学、アラビア語学、文学、歴史学、シャーフィイー一法学の分野で活躍した学者。
- 5) 本調査は、21世紀COEプログラム「世界を先導する総合的地域研究拠点の形成」と財団法人松下国際財団の研究助成を受けて可能となった。
- 6) 預言者の医学に基づいて治療を行う者に対しては、「ムガンガ(mganga、伝統医)」や「ムワリム(mwalimu、先生)」「フンディ(fundi、技術)」などの呼び名があげられる。これらの名称については、含まれるニュアンスに地域差があり、自称と他称で異なる場合もあることから、本稿では預言者の医学に基づいて治療を行う者を、「治療者」と呼ぶ。
- 7) ザンジバルの中心部。この名称は、19世紀、ザンジバルがオマーンの支配する地域の首都となり、港付近を中心として白壁の家が立ち並ぶようになったことに由来する。

地区にあるカーディリー教団のザーウィヤ (Ar: zāwiya, Sw: zawiya. タリーカの修道場) の指導者である。筆者は彼の日中の活動を観察する中で、近所の人々が頻繁に相談や治療を受けるために彼のもとを訪れる様子を、毎日のように目にした。また、2、3日に一度、彼自身が近所の年配の治療者の家に赴き、他に集まった治療者と共同で治療を行っていた。

2人目は、ストーンタウン郊外のD地区に住む52歳のS氏である。S氏は、毎日ストーンタウンの決まった場所に、本を並べて販売している。彼は10年間、ドイツとオランダで仕事をした経験があり、この期間中に預言者の医学や、様々な地域の民間医療を本で学び始めた。10年前にザンジバルに戻ってからも、独学で預言者の医学を学び続けている。彼はA氏とは異なり、他の治療者との交流を持たない。また、S氏の販売するほとんどの本が預言者の医学に関する本であった。彼はバラザ (Sw: baraza) と呼ばれる場所で書籍の販売を行う。バラザとは、多くの家の外壁に付属しているベンチである。筆者は氏の隣に座り、毎日売りもの本で預言者の医学の歴史やジンについて教わった。このバラザには、いつも入れ替わり立ち代わり人々が腰掛け、おしゃべりや挨拶を楽しんでいく。そして、彼は時折、人々の悩みを聞き、預言者の医学に基づいて調合した薬や短いクルアーンの章句を書いた紙片を手渡していた。

この2人の共通点は、アラビア語の読み書きに精通していることである。ザンジバルではほぼ全ての子どもがクルアーン学校に通い、アラビア語の初歩的な読み書きを学ぶ。しかし、それはあくまでクルアーンや特定のカスィーダ (Ar: qaṣīda, Sw: kasida. 詩)、マウリディ (Ar: mawlid, Sw: maulidi, 預言者讃歌) のテキストのみであり、一般のアラビア語の書籍を自由に理解することは困難である。それに対し、治療者は、自由にアラビア語の書籍を読み、多くのドゥアー (Ar: du‘ā, Sw: dua. 祈り) のテキストを朗読し、薬を調合することができる。人々は彼らの知識や技術に信頼をおき、両者の操るクルアーンの言葉や薬自身の力を求めてやって来るのである。

3. 治療方法

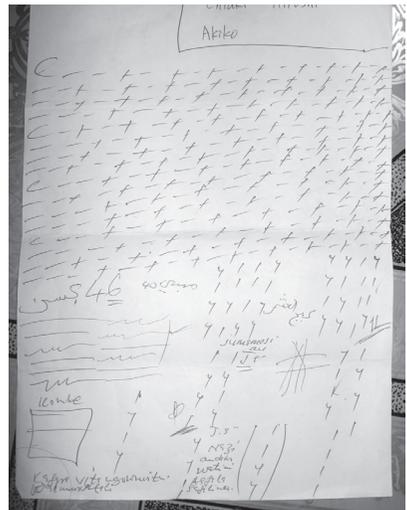
それでは、治療者の行う治療には、どのようなものがあるのだろうか。

A氏の治療方法には、主に2種類ある。1つ目は、単独で行う治療である。まず問題を抱えた人が彼のもとを訪れ、その内容を話す。A氏はその内容をふまえ、適切な治療日や治療内容、薬の種類を判断する。彼の行う治療は多様である。例えば、粉末のサフランを水に溶かして作った黄色のインクを、木の枝のペンの先につけて白い平皿にクルアーンの章句を書く。そして、皿に水を注ぎ、その水を空いたペットボトルに入れ、患者に持ち帰らせる。また他の例では、白い紙に赤いインクで短いクルアーンの章句を数回書き、その紙を一つずつちぎる。そして、飲みものに浸してインクを溶かし、毎日決まった時間にそれを飲むように指示していた。また、ドゥアーを朗読して治療を行う場合もある。例えば、慢性的に身体の調子がすぐれないという、A氏の親戚の場合である。A氏は治療の前に、白い布切れ2枚に赤いインクでクルアーンの章句を書いた。そして、そのうちの1つを丸めて切り込みを入れた魚の腹に入れ、もう1枚の布で魚全体を包んだ。治療はA氏の家で行われ、治療の時間になると、彼は立派な上着を着用して身なりを整え、治療のための特別な絨毯を敷いた。A氏がクルアーンの章句などを何度も繰り返し朗読する間、炭でお香が焚かれ、患者は時折お香の上に魚をかざしていた。この朗唱は1時間以上続き、患者は魚を何度も持ち替えていたが、疲労で手が小刻みに震え、暑さも手伝って額に汗を浮かべていた。魚を包んだ布は熱によってインクが溶け、滲み始めていた。ドゥアーを終えると、A氏と患者と筆者の3人は、魚を持って乗り合いバスに乗り、少し離れた墓場へ向かった。そして、墓場の奥まで行き、古くなって既に

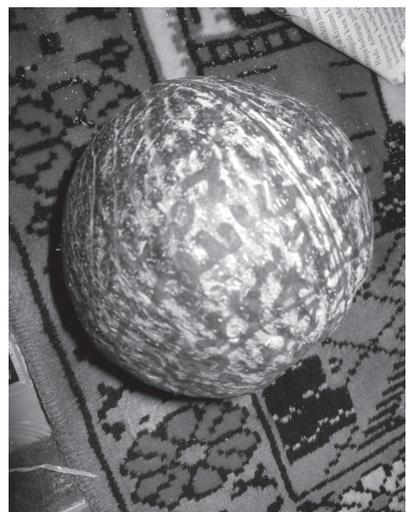
誰の墓か不明になっている場所に素早く穴を掘り、魚を埋めた。掘って埋めるまでの間はわずか数十秒であり、彼らは人に見られることを懸念しているようであった。

2つ目は、集団で行う治療である。A氏の家の近所には数人の治療者が住んでおり、緊密に交流している。例えば、A氏は自分の師匠の一人であるというT氏に度々携帯電話で呼び出されていた。T氏の家に行くと、いつも数人の治療者が集まっている。まず、T氏を始めとする治療者たちが、訪れている患者に抱えている問題を聞く。そして、患者とその両親の名前を紙の右上にボールペンで書き込む。次に、治療者同士にしか分からない記号や線などをたくさん書き、治療はいつ、どのような方法で行うべきかを診断する。この診断結果によってその後の対処が決定されるため、彼らは慎重に判断していた。例えば、ある治療者が他の治療者に、自分の受け持った患者の診断結果を見せ、今後の対処について相談することがあった。中には診断結果を見て、その家族の抱えている問題の重さに、今後どのように治療を進めればよいのか、数人の治療者が長時間にわたってうなりながら議論する場面もあった。そして、診断とは異なる日にドゥアーが行われる。患者と治療者2-4人が、円を描くように座る。そして、治療者全員が一斉にヤースィーン章（クルアーン第36章）などを読み始める。各治療者は数十ページもあるアラビア語のテキストを、美しい抑揚をつけて大声で一気に読む。患者は、時々挿入される開扉章（クルアーン第1章）など、自分で記憶している箇所を口ずさむ。ドゥアーの間、香を切らさないように、気づいた者が時折追加する。また、サダカ（Ar: şadaqa, Sw: sadaka, 喜捨）として持ってこられた鶏があれば、治療者によってお香にかざされる。

筆者にも、集団で行われる治療を受ける機会があった。特に気になっている問題はなかったが、今後の研究活動がうまく進むことを祈願するドゥアーを行ってもらったこととなった。まず白い紙に赤いペンで線や記号を書いて診断してもらう（写真上）。そして、ドゥアーを行う日時が決定され、当日にはA氏の家で、治療者5人が集まった。筆者の治療には、ヤースィーン章46回を中心とするテキスト読誦が、それぞれの治療者にほぼ均等に分けられ、約2時間行われた。筆者は足を伸ばして坐り、左右にクルアーンの章句が書かれたキュウリ各1本、足先にクルアーンの章句が書かれたココナッツ1個が置かれた（写真下）。ドゥアーの終盤、A氏は焚いていた香にこれらを一つひとつかざし、筆者に手渡すと、願い事を言いながら香にかざすように言った。筆者はまだ新参者であるので、同行するのは許されなかったが、この2つのキュウリは、1人の治療者が夜11時に人に見られないように筆者の名前を唱えながら地面に投げつけ、ココナッツも、A氏が近くの森まで行き、筆者の名前を唱えながら木に



筆者の診断結果。下部に治療方法が書かれている。



ドゥアーの際に使用されるココナッツ。実の表面にクルアーンの章句が書かれている。

投げつけたそうである。筆者に行われた治療は以上のような流れであった。

次に、S氏による治療の例を紹介する。S氏は、まず相談者の話を聞き、その内容にあわせて薬を作る。例えば、彼は様々な薬草などを調合してペットボトルに入れ、特定の時間に飲み物に煎じて飲むように、と患者に指示していた。筆者はS氏に「何にでも効く薬だ」と言われ、サフランの黄色いインクでクルアーンの章句を書いた紙を水の入ったコップに入れ、文字を溶かしたものを飲んだことがある。また、筆者が調査を終えてザンジバルを離れる際、旅の安全を祈願して、S氏は魔方陣を書いた護符を3枚作ってくれた。この護符は日本のお守りのように小型のものであった。

4. 相談内容

それでは、治療者の受ける相談にはどのようなものがあるのだろうか。第1に、体調の不具合があげられる。体調については、急性の症状よりも慢性的・長期的に患っている場合の相談が多いようである。ただし急性の場合であっても、西洋医療と平行して行われる場合がある。例えば、マラリアの症状があげられる。マラリアは、ザンジバルの人がよく患う病気の1つである。特に農村部では、夕方以降になると蚊の羽音が耳元で絶え間なく聞こえる程である。そのため、彼らはどのような症状がマラリアであり、どのような対処をしなければならぬかを理解しており、速やかに西洋医療の薬を服用する。しかし同時に、患者が治療者の診断を受け、ドゥアーが行われた場合があった。

第2に、人間関係の問題が挙げられる。例えば、あるザンジバル人女性はインド人男性と結婚した。その男性にはインド人の第1夫人がいた。その第1夫人は、夫がインド人ではなくザンジバル人を第2夫人に迎えたことを不満に思い、第2夫人をいじめるようになった。以上の経緯から、第2夫人であるザンジバル人女性がS氏に相談を持ちかけていた。

第3に、願ひ事の成就を目的とするものである。例えば、ある女性は10代で出産をした。しかし、相手の男性は結婚することを拒否し、彼女は未婚の母となった。現在20代の彼女は、やはり結婚したいということでA氏のもとを訪れていた。また別の例では、ある女子学生は、最近勉強が難しくついていけないため、良く分かるようになりたい、ということをもA氏に相談していた。

このように、治療者の受ける相談内容は、身体の不具合や人間関係、願ひ事など、多岐にわたっている。これは、西洋医学が対象とする医療の範囲とは異なるものであり、西洋医学を主要な治療方法として選択する我々にとっては、多少なりとも違和感を覚える。しかし、ここまでの観察で考えられることは、預言者の医学の扱う治療対象は、個人々が「苦」に感じることであり、ということである。人々は治療者に対し、救いと癒しを期待して訪れるのではないかと考えられる。

5. 患者と治療者の関係

それでは身体の不具合だけでなく、人間関係や祈願といったプライベートな内容を扱うような治療者と患者の関係は、どのようなものなのであろうか。

両者は、近所に住んでいるなど、顔見知りの場合が多い。近くに住んでいる人の中には、ほぼ毎日治療者のもとに相談に来る人もいる。また、ある日、ロンドンからA氏に電話があった。電話口のザンジバル人はA氏に病状を伝え、薬を送ってほしいと頼んでいた。このように、患者の中にはたとえ遠方に住んでいても、知り合いの治療者を頼ってくる人もいる。

患者と治療者は、家族構成や社会的地位、経済状況など、互いのことをよく知っている。また、双方の関係が友人や親戚である場合も多く、治療者から金品を要求することは難しいと思われる。

彼らのもとを訪れる患者の中には、サダカとして鶏や現金を手渡す人もいる。しかし、サダカは、義務ではなく、患者が治療者に示す感謝の気持ちである。そのため、経済的に余裕のない者は、感謝の気持ちのみで十分なのである。また、大変な労力を費やす治療であるのに患者がサダカを持参しなかったとしても、治療者から要求することはない。それどころか、A氏は治療で使用するコナッツを、自らの金で購入していることもあった。筆者はA氏に対して、薬代や手間賃、ドゥアー代などの詳細な料金表を作り、金を請求して労力に見合った報酬を受け取った方がよい、と言ったことがある。しかし、A氏は患者に金がない以上、それは不可能である、と述べていた。

6. 医療行為者の語り

ザンジバルにおける預言者の医学について、筆者はS氏からインタビューを行った。彼の話は、第1に、ザンジバルが1963年に独立、1964年にタンガニーカと合併してタンザニア連合共和国を形成し、社会主義路線を歩むことになったという史実、第2に、ザンジバルの初代大統領であったカルメ (Abeid Amani Karume, 1905-1972) が、1964年から暗殺されるまでの間、イスラームに関する活動を大きく制限した [Voll 2002: 450-451] という史実に、大きく関係しているようである。

第1に、なぜ現在、預言者の医学に関する本が多数出版され、治療者のもとを訪れる人が多いのかという点について尋ねた。S氏によると以下の通りである。ザンジバルの病院は1964年以降、全て官営であり、医療費も無料であった。また、政策として西洋医療以外の医療活動は制限されていた。しかし、90年代になると、民営の病院が建てられ始め、診察料や薬も有料化され、人々の大きな負担の一つとなった、ということであった。また、イスラームに関する書籍についても1970年代前半まではカルメの政策によって制限されていたが、その後段階的に緩和されていき、預言者の医学に関する書籍も多く出版されるようになったというのである。

第2に、西洋の薬と預言者の薬の関係について質問した際、S氏は次のように述べていた。西洋の薬は副作用が強い、化学薬品である、という欠点がある。さらに、西洋の薬は非常に高価である。また、精霊や魔力、不正や罪による病の薬は、クルアーンや魔方陣である、ということである。

このように見てみると、少なくとも19世紀後半以降、西洋医学が中心であったが、1964年以降のイスラームに対する制限や、段階的な緩和、人々が西洋医学の限界や欠点を感じ始めたことから、それを補う医療として、預言者の医学が選択されるようになったのではないかと考えられる。

7. 今後の課題

今後の課題としては次の4点があげられる。第1に、今回は治療者側に焦点を当てて調査を行ったが、今後は患者側についても注目する必要がある。どのような家族構成、社会的立場、性別、経済状況、苦難を抱えた人が治療者のもとを訪れるのか、患者と治療者の普段の関係はどのようなものか、なぜ治療者のもとを訪れるのか、といった点をインタビューによって明らかにし、彼らにとっての預言者の医学をより具体的に把握する必要がある。

第2に、預言者の医学以外の治療行為に関する調査である。東アフリカ沿岸部では西洋医療や預言者の医学に加え、祖霊崇拜や憑依など、他の治療行為も重要な要素である。人々が日常の苦難を乗り越えるための選択肢にはどのようなものがあり、どのような場合に選択されているのかを考察することで、預言者の医学の位置づけが明らかになると考える。

第3に、預言者の医学を通して、人々の精霊に対する考え方を明らかにすることである。精霊は、クルアーンや預言者言行録にも言及があり、ザンジバル人の会話の中でも時折登場するなど、非常

に身近な「存在」である。精霊による病気の種類や、精霊から身を守る方法を書いた書籍や物も多く販売されている。また、人々は病因を、「イスラームの道から外れたことをしたためである」と言う場合がある。人々の病因やそれを取り除く治療の過程を明らかにすることで、ザンジバルのイスラーム観を提示することができるのではないかと考える。

第4に、東アフリカ沿岸部の預言者の医学の特徴とともに、他の地域における預言者の医学との繋がりについても検討する。預言者の医学は、クルアーンと預言者の言行録に基礎を置くが、同時にイスラームの教えに反していない範囲であれば、各地域の治療行為の要素も取り込んで発展してきた。そのため、東アフリカ沿岸部においても独自の預言者の医学が存在すると考えられる。さらに東アフリカ沿岸部は、現在もインド洋海域世界との関係が密接であり、販売されている書籍や薬類も、これらの様々な国から輸入されている。そのため、インド洋海域世界に共通する預言者の医学も存在するのではないかと考える。

引用文献

大塚和夫ほか編 2002 『岩波イスラーム辞典』岩波書店.

竹下政孝 2005 「預言者の医学」『中東協力センターニュース』8/9: 113-117.

Savage-Smith, E. 2000. s.v. “Ṭibb.” *EF*².

Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili Chuo Kikuu cha Dar es Salaam. 2001. *Kamusi ya Kiswahili-Kiingereza*.

Dar es Salaam: Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili.

Voll, J. O. 2002. s.v. “Zandjibār.” *EF*².